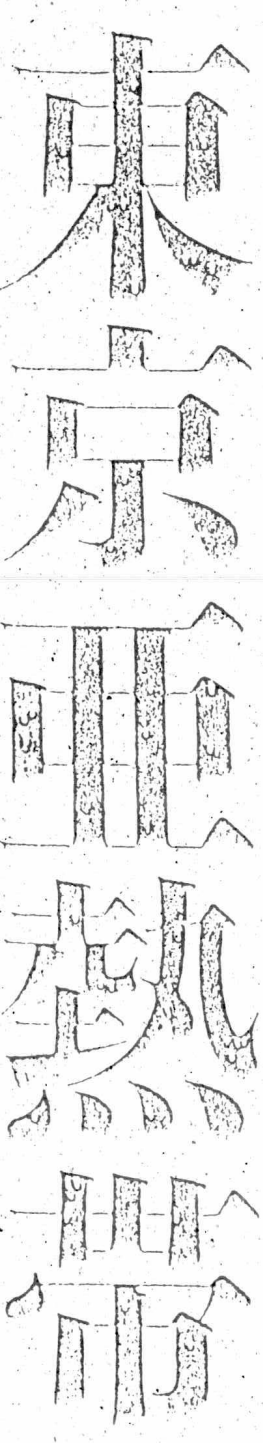
東京亜熱帯

大鶴義丹



大鶴義丹

福武書店

大鶴義丹（おおつる　ぎたん）
一九六八年、東京に生まれる。
一九九〇年、「スプラッシュ」
ですばる文学賞を受賞。著書
に『スプラッシュ』『湾岸馬賊』
『ずっと夜だったらいいのに
ね』『シーサイド・バー』があ
る。

東京亜熱帯

一九九四年　七　月　五　日　第一刷印刷
一九九四年　七　月一五日　第一刷発行

著　者　大鶴義丹
発行者　福武總一郎
発行所　株式会社　福武書店
東京都多摩市落合一－三四
〒二〇六　八八電話（〇四二三）五六－〇九四〇
振替口座（東京）二－八七三七二

印刷　大日本印刷
製本　加藤製本

（落・乱丁本はお取替え致します）
（定価はカバーに表示してあります）

©G. OHTSURU 1994
Printed in Japan
ISBN4-8288-2484-7 C0093
NDC913 194 192p

目次

東京亜熱帯　5

夏のせいかもしれない　109

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

東京亜熱帯

装画　田辺茂
装丁　砂島鯨

東京亜熱帯

1

吐きたくなった。気持ちの悪さで目覚めてしまった。反射的に脳裏に便器が過る、それだけだ。自分が何者で、一体どうしてこの場所に居るかも分からないほどの気分。体はトイレの場所を知っているよう。勝手に立ち上がり部屋の扉を開け、廊下に出ていく。ならば体に任せておけばよい。廊下の隅にトイレはポツンと待っている。なだれ込むように洋式の便器に顔を投げ出す。便座は上がったまま、頬に冷たく湿った便器が触れる。アンモニアのすえた臭いがどこからかした。暴れようとしていた胃をなだめていた意思が緩む。解き放たれたように暴れ出す胃。濁流のように酸味の液体が口から溢れ出てきた。吐きだ

すなどという肉体的な運動ではない。ポンプでくみ上げているような吹き出すといった感じだ。黄色い液体が便器に溜まりつづける。顔に登り上がる酸の臭い。こんなモノが体の中に入っていたのかと驚愕し、二度胃が痙攣したあと、何か巨大な悪が体から逃げていったように突然楽になった。

トイレから部屋に戻ると、自分がヨシヒロの家に泊まったのだと初めて思い出した。十五畳ほどのリビングルーム。めくれ上がったソファー。横になっているテーブル、奥のキッチンには食器が溢れている。冷蔵庫の扉は開けっ放し。絨毯は所々めくれ波うっている。その上の缶ビールの山と吸殻。歪んでいた。大きな力によって空間がねじ曲げられたようだった。

ソファーにはタオルケットを被った女が寝ている。上半身はタオルケットが隠しているが、下半身はさらけ出したままだった。片足を立て、股は開いた状態になっている。絶対の秘境が真夏の日差しに照らされ、丸出しになっている。強烈だ。この女が二十年近く隠し続けてきたものが一挙に公開されている。家族も友達も、自分さえ大して知らない暗黒部分。毛の生え方から粘膜の隅々まで確認できる。「あらわ」といった使い慣れない言葉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

が浮かんだ。
暑い。閉めっぱなしの部屋はかなり蒸していた。こんなところでよくも寝ていられたものだとおかしくなった。まだ寝ているこの女はもっとおかしかった。
僕は彼女のめくれ上がったタオルケットを直してやり、転がっているクーラーのリモコンを拾い上げた。スイッチを入れると窓の外の室外機が唸りだす。クーラーから室温より更に高い温度の空気が吹き出してきた。しばらくすれば冷たくなるだろうと待っていたが、何故かいっこうに冷たくなる気配はない。反対に高温になっていく。パンツいっちょうの体に当たる熱風。肌から汗が滲み、室温は上昇を続けた。まさか、と思いリモコンを見ると「暖房」の表示が出ていた。
「暑いよ……」
女が半分寝ぼけて呟いた。僕はリモコンの温度調節を高温の最高にセットし、リモコンを放り投げ部屋を出た。二階にはヨシヒロとジンともう一人の女が居るはず。女はオーブンで丸焼きだ。こんがりしたら食べごろ。階段を登りながら笑いが漏れた。
三人がいる部屋の扉を開けると、やはりその部屋も歪んでいた。ベッドはずれ、テーブ

ルはひっくり返り、脱ぎ捨てた服がそこらじゅうに散らばっている。女はいない。二人の男がベッドで並んで寝てはいるのだが、女の姿は見当たらなかった。部屋を見回してみるのだが隠れられるような場所はない。小さなこの家には他に部屋などなく、考えられるのはベッドの下ぐらいだった。念のためにとベッドの下を覗いてみると、そこには白いパンティーが一つ転がっているだけだった。手を伸ばして取る。広げる。陰部に当たる部分に黄色い染みがうっすらと付いていた。恐る恐る顔を近づけて、ゆっくりと匂いを嗅いでみる。おしっこの匂いが微かにした。が、もう一つ不思議な匂いが隙間に隠れていた。何だろうと思いもう一度強く嗅ぐ。おしっこの匂いに耐えながら嗅ぎつづけると、その匂いは見えてきた。知っている匂いだ。喉までその言葉が出てくるのだが、何故かその言葉が思い出せない。

「何やっているんだよ」

ベッドの上でヨシヒロが見ていた。僕は慌ててパンティーを顔から離したが、ヨシヒロは一部始終を見ていたようだ。

「女がいないよ」

仕方なしにそう言った。別にパンティーの匂いを嗅いでいたことで変態呼ばわれされたってかまいはしないのだが、余りにいきなりだったので反射的に誤魔化してしまった。
「帰るって、夜中に出ていった」
ヨシヒロは眠そうに答えた。寝起きのせいかパンティーのことは余り分かっていないようだった。僕はパンティーを再びベッドの下に放った。
「だって俺の方の女は下にいるよ」
「関係ないんじゃないの、一人で帰ったんだよ」
「やったの？　三人で……」
「ヤッタよ。凄かった。この世のモノとは思えないような凄いヤツ」
「どんな」
「どんなって……とにかく俺とジンで挟み打ちだよ。フェラ・バックってヤツだよ」
「お前とジンで向き合って」
「そう、だけどジンの顔見てるとなかなかイカないんだよ。ハハハ」
「ハハハ、そりゃイクわけないよ」

僕は彼らが昨夜三人で繰り広げたであろう姿を思い浮かべた。横から三人を見たら、H型に見えるだろう。

「暑いな、クーラーつけたら」

ジンが起きた。パンツもはいていない。縮こまってくすぼけたペニスが日に照らされている。屈強な肉体にはうっすらと汗が滲んでいた。彼の胸の三角筋が綺麗だった。

「クーラー駄目なんだよ。ガスが抜けてるんだよ」

ヨシヒロはそう言うと立ち上がって窓を開けた。温かい風が網戸をすり抜け、三人の体を平等に撫でていく。

「買えばいいじゃない」

「禁止されてから高くって」

「下のは大丈夫なの」

「ダメ、扇風機で我慢してよ。ホラ、汚いパンツ」

ヨシヒロがベッドに転がっていたジンのパンツを放る。パンツはヨットの帆のように夏の風をはらみ広がった。

「東京中のクーラーが駄目になったらおかしいな」
ジンはパンツを受け取り、はく。
「下の女……死んでるかもな」
僕は呟いた。誰にも聞こえてはいない。ヨシヒロはまだ寝ぼけたまま、ジンはパンツを裏返しにはいてしまったのに気付きそれをはきなおしている。
「今日もさぼって、今月は四日目。こりゃクビだ」
僕は今月になってから会社をさぼってばかりだった。
「あれだけ飲めば起きれないって」
ヨシヒロが煙草をもみ消した。
「俺みたいにはならないほうがいいよ。タカはいい大学だって出てるんだし、頑張ったほうがいいよ」
ジンがベッドで寝ころんだまま言った。僕はこのメンバーに諭されるのは辛かった。本当に反省してしまう。
「いい加減に考えなきゃって思っているんだけどね。転職するにしろしないにしろ。でも

サラリーマンはもういやだ。絶対に俺には向いていない。おれは犬にはなれないよ」
「店だって同じだよ。生意気なガキにもありがとうございますだよ」
ヨシヒロは実家が経営するコンビニエンスストアーを手伝っている。
「タカ、下の女はどうしたんだよ」
ジンが飛び起きるように言った。
「蒸し焼きにしてやった」
「何だよ、それ」
「素っ裸で寝ているから、締め切ったままヒーターを付けてやったんだよ」
僕がそう言い切ると、二人は弾けるように笑いだした。話もできない程に笑い転げていた。僕はそんな二人の笑顔を見ていると、会社なんかいつやめてもいいような気がした。
「素っ裸で足広げて寝ているんだよ。見に行く？」
「何で早くそれを言わないんだよ」
三人は部屋を飛びだし、僕を先頭として階段を足音を忍ばせて降りていった。互いに顔を見合せうなずく。覗きだ。しばらく忘れていた感触。僕は中学の修学旅行を思い出し

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com